

□ 評 論

大 坪 盛

●日本音楽芸術マネジメント学会／シンポジウム「音楽批評の今日的役割」

年も押し詰まった年末の12月15、16日の2日間にわたって、「日本音楽芸術マネジメント学会」の第11回冬の研究大会が昭和音楽大学で開催された。「日本音楽芸術マネジメント学会」は2008年に設立され、設立記念シンポジウム「今、劇場は変わるのか？」を皮切りに、文化芸術政策に関して様々な角度から幅広い意見表明を、研究会、会報などを通して行ってきた。

10年間の活動の集大成として行なわれた研究大会では、2日目の16日に「音楽批評の今日的役割」、「文化芸術への助成制度を考える」の2つのシンポジウムを初め、「研究報告」や「現場レポート」など多彩な内容の行事が展開された。

その中でもシンポジウム「音楽批評の今日的役割」は、新聞・雑誌などの紙媒体を中心とした活字メディアから、ネットへと批評の発信方法が変遷の一途を辿っている現在、正に時宜を得たテーマの一つといえよう。

音楽批評の発信の場としては、これまでは音楽批評のプロフェッショナルな立場の音楽評論家、音楽学者、音楽ジャーナリストなどの発信に限られていたが、近年のネットの発達により、アマチュアもプロフェッショナル（この境界線も難しいが）も、自由に自らの考え方を発信することが可能になった現在、音楽批評の位置はかなり変化しているのではないかと。

音楽批評の役割自体も、従来は音楽鑑賞者の一つの手引きとして、あるいは一つの文学的的作品として、あるいは大きく言えばその時代の音楽的思潮のプロパガンダとして重要な音楽活動の一端を担っていたが、今日はどうか。

新聞や雑誌でも批評のスペースは減少傾向にあり、ネット上も責任の所在がはっきりしない発言が横行しているケースも多々見られる。音楽業界全体が音楽批評活動を以前ほど重要視していないのではないと思われる現在、音楽評論、音楽批評はどうあるべきかを考える時に来ているとも言えよう。

今回のシンポジウムでは、パネリストとして音楽評論家で、活字メディア、ネットの両方で批評活動を行っている東条碩夫、新聞を中心に批評活動を展開している平野昭、音楽マネジメントの立場から入山功一（AMATI代表取締役）、批評を掲載する立場から新聞記者の松本良一（読売新聞文化部）、モデレーターに自らも音楽批評活動を行なっている中村孝義（音楽学者、日本音楽芸術マネジメント学会理事長）の5人の出席者で討論が行なわれた。

各パネリストの意見はそれぞれの立場から、又様々な角度から展開されたが、要約すれば、批評の速報性と記録性が重要だということ。更に批評が誰のために、何のために必要なのかということが希薄になっていることが上げられるが、音楽批評の重要性に疑問をとなえるパネリストはいない。

しかしその形態としては、質・量、発信方法、そしてその影響力は、昔日とは大いに異なってきたと言わざるを得ないだろう。年間に日本全国で何万回と開催されるコンサートのうち、わずかなものにしか光を当てることしかできない音楽批評活動、特に活字メディアによるそれは、今後更に減少の一途を辿り、その現象がネットの発達により一層加速されることは間違いない。そこでプロフェッショナルな音楽批評家がどのような

役割を果たすか一層の注目を集めることだろう。

●第5回「柴田南雄音楽評論賞」

一方そのプロフェッショナルな音楽評論家への登龍門と言われているのが「柴田南雄音楽評論賞」である。作曲家で音楽評論の分野でも多彩な活動を行なった故・柴田南雄氏の業績を顕彰した賞で、継続されている音楽新人評論賞としては日本で唯一のものである。

前述した音楽批評シンポジウムでは、新人音楽批評家・評論家の育成についてはあまり話題に上らなかつたが、今日の音楽批評の役割について考える時に、どのような経歴、考え方、才能を持った人が音楽評論家に必要なかは重要な問題である。

「柴田南雄音楽評論賞」は、「音楽評論を社会に広め、音楽文化の質の向上に貢献することのできる音楽評論家を育てることを目標として、将来期待される個人に対し、その活動を顕彰し、または助成する賞金を授与すること」を主旨としている。

第5回柴田南雄音楽評論賞（前身のアリオン音楽財団主催から数えると17回目となる）の本賞は昨年に続き鐵百合奈（香川県出身、東京藝術大学修士後期課程音楽専攻）の音楽時評と評論「演奏の復権～『分析』から音楽を取り戻す～」、奨励賞に西村紗知（静岡県出身、東京藝術大学大学院修士修了）の音楽時評／評論「人工重力と抵抗—1960年代の創作意識について」が選ばれた。選考委員は音楽評論の梅津時比呂、平野昭、音楽学の長木誠司、文芸評論の三浦雅士。

本賞受賞の評論は、音楽における「演奏」と「分析」の関係性について述べたもので、自身ピアニストでもある筆者は、相互に関係し合うように見えていた「分析」と「演奏」が、実は「従来から分析的研究における「演奏」の位置づけはほとんど無視されてきた」と述べ、その状態から「演奏」の復権を目指すことを表明したもので、鐵百合奈は同賞史上初の2年連続の本賞受賞となった。

昨年の本欄でも触れたが、この賞の名称に入っている「評論」の定義がどのようなものか、又「評論」と「論文」の違いは何か、あるいは賞の主旨である「音楽評論を社会に広め」、「音楽文化の質の向上に貢献」という主旨は何を意味するかを考えると難しい。

三浦雅士審査委員長は選評で次のように書く。「端的に言って、音楽評論の世界はどうしてこれほど世界が狭いのだろう」という思いが胸中を去らなかつたという。そして選評をこう締めくく。「日本の現代音楽の世界は、長いあいだ締め切っていた窓を開けなければならぬと思う。もはや音楽学校の優等生であってはならない。」と。

文章中の「現代音楽」とは「音楽評論」に置き換えてもいいだろう。勿論音楽評論の世界の専門用語があつていいし、楽譜が入つてもいい。しかし一部の音楽人にしか分からない「評論」であつてはいけないし、内容であつてはいけないのではないだろうか。

その意味で評論家・片山杜秀の最近の活躍は目覚ましい。論壇、文壇、楽壇を横断しての発言は、三浦雅士のいう正しく「締め切った窓を開けている」存在といえよう。近く上辞される「鬼子の歌」は、文芸誌「群像」に連載した時から注目を集めていたものだ。「偏愛音楽的日本近現代史」とのサブタイトルが示すように、山田耕作、伊福部昭、黛敏郎、三善晃など、近現代を生きた音楽家とその作品を辿りながら、日本の歩みに迫る「クラシック音楽」で日本の近現代100年を読む正に奇（希）著といえよう。

近年の「音楽評論」、「音楽批評」は面白くないとよく言われるが、どっこい、まだまだ書き手はいる、テーマもある、そしてそれを期待する読者もいることを忘れてはならないだろう。